

い儲からない仕事を承知しながらやる人もない必ず儲かるだらうと思つてやるに違ひないけれども、時に依つては儲かり、或は時に依つては意外の損失を招く如きことがある。けれども其所は仕方がない。それが即ち商法である斯ふ云ふ様に商法も其の結果が豫想通り必然的の者でないから、其の方法手段、即ち商業道の最善なるものを辿り、出来得る限り満足な結果を見ねばならぬそこで商法家の行く道も佛教者の行く道も、道は同じであることを辨ねばならぬ。佛教者にして、若し、商法家の道をしらなかつたならば、佛教者としては成功して居ない人である、又商法家でも、佛教の道をしらぬ人は、只無茶苦茶にやつて居る人で、本當の商業の道をしらん人だらうと思ふ。佛教中の鎖末な一部分の厭世主義とか、未來主義とか、

現世はどうでも宜いといふやうな曲解し易い(そこで大なる世間的積極的釋義はあるけれど)一部の言葉をとつて誤つたる考をしては仕末におへぬけれども、道を極めて見れば、畢竟同じことである、同じことは分つて居りながらどうも、其の行きかたが難しい。

□商人は商人臭くせよ

學者の學者臭いも宜しからず、坊主の坊主臭いもいけない軍人の軍人臭いもいけない、只特に町人の町人臭い、實業家の實業臭いのはどふも奥床かしい、坊主の坊主臭いのは、どういふ臭ひがするか、自分ながら分らないが、學者の學者臭いのは氣障なものだ、財産家の財産家臭いのも鼻につく、只、商人の商人臭いのは非常に奥床しい

これはどういふ譯かと云ふに、この妙味といふのは、町人臭いといふところに、何ともいへぬへりくだつたところがある。頭の低いところがある。どうも何々大學を出て来たとか、高等商業でも出て来ると云ふ様な人の中には教育のない奴に頭を下げるは馬鹿らしいなど云つて首の骨がイヤに固くなつて来る人もある。終には仕方がないから、僕は人間には頭は下げぬけれども、金に頭を下げてやるといつて居る様な者も二十年ほど前にはあつた、今日ではそんな人は殆どないが、この町人の町人臭いのが奥床しいのは、只謙の一字にある、謙といふことは廣義に味はつて見ると、頭を低げるばかりが謙でない、へりくだるだけが本當の謙ではない、一萬圓の資本のある人が七千圓までへりくだつて商をする、スツカリ間違つても三千圓

の餘裕が残る、さういふものでなければならぬ。十杯飯を食ふ人が八杯で謙遜してをけば、お醫者様に掛らずに濟む、それはさうだが九分の言葉にツツはなしと云ふことがあるが全くそつはない事である、町人の町人臭いのは、坊主の坊主臭いよりも、學者の學者臭いよりも奥床しくて何んともいへん好い心持がする、番頭さんや丁稚さんが知事臭かつたり郡長臭かつたり、主人が大臣臭かつたりしては商賣は成功せぬ。矢張り町人は町人臭くなくてはいかぬ。商法家の奥様が昔の殿様の夫人の様では商賣は調子が悪い、「御免下さい」、「何の用事か」それでは商賣は繁昌しない。町人の奥さんは矢張り町人の奥様らしくなければならぬものだ。近頃は、どうも高等の教育を受けた御婦人方が商人の家内になつても、こんな事は「妾の理想で

ないのよ」となんて貴婦人臭くていかん。矢張り商賣人は商賣人らしくなければ味ひがない。それといふのが、即ち謙の一字にある。商賣家は謙でさへあれば敵はない、算盤の上ばかりではない、凡ての起居動作の上に於て、謙であつたならば最後の勝利を得ることは請合である。實際に上からカツと動くよりは下からゆく方が得である。

私は劍道のことは知らないけれども、芝居でよく見るが、敵討をするのでも、仕舞にまけて殺される奴は始めに是非大上段に振翳る、勝つ奴は下からゆく、何でも殺されて了ふ奴は己れ糞つと、上からゆくが、上から行く奴は暫くする内に疲れて了ふ。それだから負ける、下からおとなしく行つてゐる奴は長く續く、それだから最後の

勝利を得る。矢張り商賣家もこの通りであらうと思ふ。然してこの謙といふことは商賣家だけに用ゆべき機合で、佛敎者の用ゆべき機合でないかといふに、佛敎者はそれ以上のことをいふ。即ち無我的人といふことがある。無我ほど優れた謙遜はない。私共は頭を叩かれたらブツ／＼いつて怒るが、無我ならば決して天下に敵はない、恰も商賣家が謙なれば天下に敵なきと同様である。さうして見ると商賣家の活用する機も、佛道修行者の活用する機も變りがないといふことが分るのである、然らば機關はどういふ處にあるか。

□如何にして道を辿る

これを辿つて行くのに行き方が悪いと飛んだところに這入て了ふ。

人が拵へて置いた道ならば、只歩いて居れば行けるけれども、こればかりが道ではない、商法家にしても、佛教修行者にしても、從來ある通りの道を行くのも道なれば、又、時に應じて新しき道を開拓して行くのも道である、今日吾々僧侶は、殆ど六百年前の古い道を辿ることさへ覺束なくやつて居るやうな次第であるが、それは吾々僧侶が遅れて居るので、諸君が進んで居るといふのは其處だ、吾々は行基や弘法がよい道を開いて置いて呉れたところさへ、まだしつかり進めないといふ情ない仕末だが、商法家が勢力を得たならば、道なきところを刈り分けて、社會の先覺者となり、自分も利益を得他人にも利益を與へて行くやうな道を開いて立派な成功者の位置まで到達せねばならぬ。先きに行つた人は男爵になつて、後から行つ

た人は損をする、古川市兵衛とか、森村市左衛門とか云ふ人が男爵になつたと云ふが、彼等は皆當時の社會の先覺者となつて、眞先きに立ち荆棘を切開いて後人の爲めに坦々たる大道を造り後人の進路を平易ならしめたからである。故に先きに行つた人は利益を得て男爵になつたけれども、後から行つた奴は何にもならない、素寒貧だ佛教の祖師方のおやりになつたことも皆さうである。何れにしても比較對照して見ると、商業の先覺者、佛教の先覺者、古の偉人のやつたことは、皆精神的の先覺者となり、物質的の先覺者となつて居る。然して物質が先きか、精神が先きかといへば、それは矢張り精神が基本になつてゐたことは疑ふ餘地がない。先覺者のみに止らず凡て事業を成すには精神が第一に立つ者である。假に諸君が喧嘩を

するとして、豈夫これから喧嘩をしますといつて、立合ふものはない、疝癪を起して横面を張り倒すけれども、これは物質の腕が先きに横面を張倒して、精神が後から起つたかと云へばさうではない必ずムラ／＼と疝癪を精神に起して、其から腕に力が入つてコツンと行くので、無意識で頭を叩くことは決してない。オヤ頭を叩きましたか、失禮なことを覺へず手が致しました、と云ふものはない。それと同じことで苟くも此の人の行かないところの道に進んで行くといふのには、矢張り精神が無我となつて進み、無我を根抵として謙遜の徳が表はれ、さうして佛祖の道の如くに、大慈悲心を以て、斯くすれば社會の爲になるにきまつて居る。斯くすれば人類の爲に利益になるだらう、斯くすれば社界全體の利益になるだらうといふ

親切が根抵の機關となつて動くのでなければ不可能である、只無暗に人の行かんとところを行き活動さへすれば、偉いといふのではないそこが大切なことである。其の道の行き方機關の轉じ方の上手と下手とに依つて、利益を得る人と得ぬ人とがある。

□利益は近きにあり

世間では大きな遠いことばかりを喧しく云ふけれども決してさうではない、まだ／＼手近いところに幾らも利益があるだらうと思ふ、諸君のやうな物質を専門としてゐる人が、算盤を活用して、社會を達觀したならば、手近いところに幾らも利益の種はあるだらうと思ふ、一例が此間も電車に乗つて、その中で、小さい書物を讀んで居

た。此の書物が一枚切れて居らぬところがある。指で切ると大きく破れる、燐寸も持つて居らず、楊枝も持つて居らず、何にも持つて居らぬ、何で切らうと考へて居る内に、電車の切符があつた、嵐山まで、だから小さい札が三枚あつた。其の三枚を合せて、ナイフの代りにして切つたら、うまいこと切れた、而かも電車の切符は損まぬ、其時私はそう思つた。これで紙を切つても電車の切符は破損せず、又、電車の切符で本の破れて居らぬところを切つたならば、法律違反といふこともまだない、決して不都合はない、そうして非常な利益を得た、それで電車賃が高くなつた譯でもない、面白いものだ、この通りに世の中には、随分活用すれば間に合ふものが澤山ある、電車の切符一枚でも、之を利用するときは切符の用も足れば、

鉄の代りにもなる、大した働きた、世の中の人が頻りに不景氣で困るとか、商賣がないとかいつて不平をいつて居るが、もう少し細かい處に着眼したら、面白いことが澤山あると云ふことを、つくづく思つたが、全くこの通りで、注意のしやうによつてどんなことでも役に立つ事があるだらうと思ふ。

河村瑞軒といふ人は、天下の御用達をした、又天下の請負をした人で、今で云へば藤田組ぐらゐの事業をやつて居つた、何百人といふ人を使ふといふ大財産家であるが、ある時、勝手に行つて、下女が御飯を炊いて居る所を見たら、薪が一本燃えさして外に出て居つた河村瑞軒が「何だ、こんな事をして勿體ない」といつたら下女が面を膨らせて、「一體こんな大家の旦那が薪一本で小言をいふとは何たら

う、といつて舌打をした、「コレ、さう小言をいふな俺は何萬人といふ人も使へば、何百萬兩といふ金も使ふ時には使ふ、富士山の絶頂に上つて見ると、東海道が一面に見える、あれをスツカリ填めさして田地にしたならば、どれほど利益があるか知らん、と思ふ又た竈の前を通る時に、木の葉一枚落ちて居つても燃えろと思つたら拾つて歸る、これが俺の心ちや、腹が立つたら許して呉れといったそうだが、斯ういふところがなくてはならぬ、富士山絶頂から眺めて東海全體を新田に開拓しやうかといふ大なる抱負もなければならん、又一面には道端に落ちてある枯枝を拾つて、薪にするといふやうな細心な注意も拂はなければならん、これでこそ成功することが出来るのである。故に商法家の行く道も、吾々佛道修行者の行く道

も少しも變りはない。故に、商法家が佛敎殊に吾々禪宗の雲水がやつて居る修行の如き精神を以て、社會に立つて行つたならば、餘程面白いことが澤山あるだらうと思ふ、又、日々のことも不平もなく面白くやつて行くことが出来る。商人と云ふ者は只利益を得るだけが天職ではない。只無茶苦茶に樂をしやう、安樂にならう、と云ふ考よりは、毎日此の商人として行くべき道を踏み外さないやうにして、行くといふ心掛を持つたならば、必ず自分の利益を得、他人にも利益を與へることが出来て、圓滿に自利々他の最大機關を成就することが出来るのはきまつて居る。只樂に利益を得やうとするからいけない。斯う云ふと失禮であるが、どうも今日の人間はやはり間然するところがあるやうだ。火鉢にあたつて居る、友達がやつて來

る、「寒いな、何かボロイことはおまへんか」と云ふ、ボロイと云ふことは一體何を意味するか。ボロイと云ふ言葉の内には明らかに何か暴利な儲口はないか、と云ふやうな意味が含まれてゐる。さういふ着實でない精神を持つて居る人が多い之が現代の一般的傾向になつてゐる。炬燵にあたつて寝轉んで居ながら、何か澤山金を儲けやうといふ者に没頭してゐる。それだから、人の顔さへ見れば、ボロイことはおまへんかといふ之は手を拱いて甘い汁を吸ふやうな考といはねばならぬ。働かさへすれば金は何處にもある、商機と云ふことを心掛けて居りさへすれば、どういふことでも出来るものだ。

□四ツ手のランプ

此の間私が三河の方へ行つて、檜山村の定林寺といふ山寺に一泊した、餘り美しくない寺であつたが、そこに四ツ手の大きなランプが燈けてあつた。夜明頃にランプの中で何か騒ぎ出したので、不審に思つて、ヒョイと見ると、ランプの中に冬の寒むさに堪へかねて虻が一匹這入つて苦しんで居る、見て居ると、ランプの口金が焼けて居るところへ飛込んだのだからたまらないグル／＼口金のフチを幾十回となくブウ／＼泣いて廻つて居るけれども何遍廻つて幾許愚痴を云つても出ることが出来ん、ヤケドをしてはブ、手を振つてはブ／＼／＼足をうごめかしてはブ／＼あつちへ行つてはブ、二十何遍もブ、をやつて到頭力ら盡き體疲れてブ／＼／＼と思痴を云ひながら死んで了つた、其の内に又一匹飛込んで来たが、其

奴はブーンといふなり、一遍に火の中へ飛込んでそれでお了ひになつた、私はそれを目撃して面白く思つた、丁度その時は十二月二十五日の夜、京都でも、東京でも大阪でもブブブ、借金といふ焼傷をして見たり、色々なことをして焼傷をし、十二月の末になつて、妙な手付をして蛇が熱いホヤの中へ這入つてブブ、ブ、といふやうに、何かボロイことはおまへんかブブブ、何か好いことはおまへんかブブブ、と、そんな調子である。年の暮になるた、四手のランブの中へ蛇が飛込んでブブブ……云つてゐるやうに、いくら廻つても、焦つても、免れやうと思つても同じことだ、ブブブ……來月になつたら幾らか樂になるだらうブブブ……。これでは何處まで行つても樂になるものでない。それよりは、ブーンといつて火の中へ飛

込んだ方が賢い、苦しいことも、熱いこともない、斯う云ふからとて死んで了つてはいけない。斯ういふことを聞いて、川にはまつては困る。人間は苦みを別にならうと思ふから餘計に苦しむのである。冬の寒い時に、寒いくで炬燵の中に入つて居れば出る時はないのだから活潑に水をかぶつた方が、後から暖くなつて、氣持がよい斯ういふ調子にやらなくちや駄目だ、借金で困るなら、寧ろ借金の中へ飛込んで了へば樂だ。破産をした人は、多く呑氣な顔をして居る金を返さないでうまくやつて往きたい、利息を負けて貰ひたいと云ふのでブブブ……、何時までも泣いて居るよりは、ブーンといつて一思ひに、火の中へ飛込むといふ勇氣が必要である。これ位の勇氣を振つて、寒中に水を浴びるやうな調子で行けば、借金を脊負つた

儘、氣樂に年を取ることも出来る、茲が大勇斷のある處で禪の所謂大死一番大活現成の妙諦である。一思ひに飛込む勇氣が肝要な處と思ふ。「飛込んだ力で浮ぶ蛙かな」といふ、句があるが、仲々味の存する處で、早く苦みを免れやうといつて、ブブブ……いふよりは飛込んだ力で浮ぶ蛙かなと、一思ひに飛込んで了つたら、其力で又浮んで来る、何れから大機に投じて、眞理は同じことであるが、その投じ方が、勇氣のある人は困難を困難と思はない。如何なる困難でも決して狼狽えない、山中鹿之助は、三日月を拜んで、「七難を授け給へ」と云つた。斯ういふ勇氣を持つならば世の中に困難なことはない如何なる困難でも通り抜けて、さうして本地の風光を省るとき其所に面白いことが出来る、この力を得るには、どうしてもこの

町人臭い、所謂謙の徳を發揮致さなければならぬ。

□無我になれ

その根底には武士道で鼓吹する所の無我、我もなければ人もない、我を滅亡して滅亡し盡せば大なる我と云ふものを發揮することが出来る、私共や諸君の此の身體を佛教では色と云ふ。手もあれば足もあり眼もあれば鼻もある。此の身は四肢五體の總合體では事實上儘かに現存して居るには違ひないが、佛教の上から此の身體の根源實性を詮索して見ると、皆な極微から出来て居つて畢竟之れぞ自分の身體であると云ふ永久に固つたものはない。よくよくその本源を究めて見ると終に空といふ處に歸着して了ふ。「櫻木を打ちわりて見れ

ば何もなし花の種とは何を云ふらむで、年々歳々美しく咲きみだれる櫻の木を寸々に打割つて見てもこれぞ花の種と覺しき物は何もない、此の頃は時々大風が吹いたり大雨が降つたりして居るが、古歌に、「吹くときは音さわがしき山風も吹かざる時はいつちゆくらむ」とある、天地が震動するかと思はれる様な大風でも止んでしまへば今までの風は何所へいつたであらうと云つて、世界中を探しても見える風の在る處といふものはない。只空気の波動する力に依つて暫く風と云ふものが現はれるのであつて、畢竟するに風そのものはない、けれども、只今は風は少しもないと云ふ中に、斯うして扇子を出して使へば忽然として現れて来る。だが今風が出て来たからと云ふてその風を取り留めやうと思つてもモウ風はなくなつて居るでは

ないか。あるかと思へばない、無いかと思へばある、是れが天地萬象の實相である、斯う吾々の身體を分析して見ると其の自性は元來空である。たとえ分析をしないでも、其の儘空であると云はねばならぬ。此の理が解りさへすれば自然に無我の境界に達することが出来る。

□夢窓國師と武士

私は只今天龍寺の開山夢窓國師の入寂なされた臨川寺と云ふ寺に住職して居るが此夢窓國師は七朝の國師とも成られて足利時代の七代の天皇より國師號を賜つた國の爲に大に力を盡された方で、天下に夢窓國師を知らぬ人はなかつた程の學徳兼備の高僧であつた。斯様

に國家に取つても、大切なお方であるから、足利の館へでもお出下になる時は始終御駕籠で計り御出になつたのである。元より禪僧の事であるから箇人として私に旅行でもなさる時にはいつも雲水の御姿であつたそうだが、或る時一人の御弟子を連れ信州の中野といふもとお住居になつて居た所へ歸らうと思つて都を後に東海道をお下りになつて、天龍川へ差掛られたが、此天龍川は大井川富士川と共に東海道の三大河の一つで、何しろ水嵩もあれば、川幅も廣いから能く船待ちをさせられたものであつた。運がよくても、大抵は一時間や二時間は船待ちをする覺悟をせねばならぬ。大水でも出ると、事によつては二日も三日も船待ちをする事もあつた。窓窓國師は一時間ばかりも船待ちをして漸く船に乗られた。所がホンの渡しの小

船であるのに客は一ぱい乗り込んで居る、船頭は棹を取つて今船を出さうとする所へ、「オオイ、其船待つた」と云ひ乍ら走つて來たのが一人の武士である。何所ん飲んだか非常に酔うて居る、モウ乗込む場所もない小船の中に無理やりに乗つたが生酔の武士の事であるから誰れとても咎めるものもない。夢窓國師は隅の方へ小さくなつて居らると彼の武士は酒臭い息を爲ながら、斯うバタ／＼と動いて然かもヨロ／＼して居る。そう動きなされると船が動搖ぎます、小船の事であるからお静かに願ひたいと、仰しやると、其武士は、「狭くて困るから邪魔になる奴は投げ出せ」と暗に夢窓國師にあて、云ふ、「コゝに居る坊主などは外へ投げ出して構はぬ」、随分亂暴なことを云ふ奴だ、「貴公はそう仰しやるが少しの間我慢をなされ

ば直ぐに向ふ岸に着きます。私どもはハヤ一時間ばかりも船待ちをして居たのであるから、どうか暫くの間お静かにして居て下さい」と云はれると、「何、静かにして居て呉れい、喧しい、己れは静かに出来ない性分だ、出ろく」と云ふて聞かぬ、國師も随分亂暴な人間だと思ひ乍ら別に逆はずに知らぬ振で居られると彼の武士は、「ナゼ出ぬか」と云ひつゝ鐵扇を以て國師の頭を打つた、彼は何所かの乞食坊主とでも思つたものであらう、すると頭の皮が少し破れて血が流れた。其のお傍に居た國師のお弟子は非常な腕力家であつた、元は北面の武士で劍術が出来て腕が強い、先刻から此の有様を見て居たが、此の時憤然として、怒りを發し、「お師匠様、今日は御免を蒙ります、此の様な武士を活かして置けば旅人の妨げになります最

早堪忍が出来ません。私は天に代つてこの様な武士を引き裂いてしまします」ととくやし涙をはらく流がして云ふと、國師は流れし血汐を紙で拭き乍ら顔の色も變へられぬ、「お前は此位な事で腹が立つのか」「ちやと申して餘りと云へば傍若無人の振舞であります。御師匠さんに對して斯様な亂暴なことをするとは捨て置き難い奴であります」。國師はニツコリ笑つて「併しこれが佛法の修行ぢやないか。口先ばかりいくら忍辱行などと云つてもかういふ場合に勘忍が出来ぬやうな事では役に立たぬでは無いか」と云ひ乍ら一首の歌を詠まれた、「打つ人も打たる人ももろともに、唯一ときの夢の戯れ」、これが無我の境界である、打つ人も打たる人も皆一時の夢の戯れである」と諦めが附いたならば、斯う云ふ逆境に臨んでも泰然不動で決し

て顔色を變へ唇を振はし拳を握り怒りを漏すと云ふ様なことはないものである、國師は笑ひを帯びてかく仰せられる。其一首の歌に依つて流石のお弟子も腹立てる譯にもいかぬから漸く氣を静めて控へて居る。其の中に船は向ふへ着く。國師は向ふの河岸にて水を掬うて血汐の滲んだのを洗つて居られると、其傍へ來て頭を下けた者があつた。あるから能く見れば唯今の武士であつた、此武士は又何にか云ひに來たのか執心の深い奴ぢやと思召してお出でると、武士は頭を砂の上ですり着けて、「貴師は一體何れの御僧で在するか存せぬが、實に感じ入つたる尊きお方である。先程よりして粗言を申上げたるのみならず、お頭に疵まで致したる無禮の段は御慈悲にどうかお許しを願ひたい。私はモウ佛法の信仰も無く神佛を信ずる事を知らぬ大惡

人で、貴師の如き名僧に向つてすら言語に絶えたる無禮を加へましたにも關らず、少しのお憎しみの無き様子は先刻の和歌を以つても解ります。實に私は徹骨徹髓懺悔悟を致しました。今日より御弟子の一分に加へて下されたい」と云つて涙を流してお詫に及び、到頭國師のお弟子に成つてしまつた、所謂無我に敵なしと云ふ所であらうか。

□無我になれとは馬鹿に

なれと云ふにあらず

只無我々と云ふても、頭を叩かれて、誰方でございますかといふやうな無我では困る。それでは人生に處しても丸で枯木のやうなも

のになつて了ふ。禪僧などでも唯無の一方になると人生を馬鹿にしてしまふ。従つて世を利する活動が無くなる。事によると盲目坐禪になつて、見識一方に傾き、殆ど非常識に陥いることがある、人間界の階級に對しても、佛教では無論一如平等の理を説くが、それが爲に人世の秩序を破壊する様なことはない。故に天皇陛下に對し奉つては絶対に重々奉戴の誠を盡し、陛下の爲めには飽までも忠義を勵みて報効の力を致すといふ、健全なる國民道徳が平等の上から自づと現はれて來ねばならぬ、何故かと云へば君は君たり、臣は臣たりといふ差別の一方のみに執着しては上下心を一にすといふ眞の融和は出來ない。階級の中に無階級の理が循環してこそ國家を維持し且つ發達させてゆく事が出來るのであると思ふ。

佛教に説く所の、體、相、用と云ふことは其の道理を説明したものです體は本體で平等である、相は姿であるから差別。用は即ち作用であるから平等差別圓融の妙徳である、本體は根源の理であるから今日の哲學者でも之を説いて居る。故に理の一方のみを説いた丈では空論するに過ぎぬ。元來本體があれば必ず相がある。相があれば必ず作るといふものが、必ず現はれねばならぬ。其作用が萬物の妙徳であつて、之を佛事ともいふのである。春になると鶯がホウホケキヨウと啼て居る。ホケキヨウと啼いたからとて鶯そのものは別に人を樂しませやうといふ様な考へがあるのではない。ホウホケキヨウと啼くのは即ち鶯の天然自然の妙徳が現はれたので自然の禪機である親が子に對する情も、子が親に對する情も亦天真の妙徳である

から、云ふに云はれぬ味のあるものである。其の根本は元來平等であつて其の平等の儘が即ち差別の働をして居る。而して其の差別の上に人間道徳の標準なるものが現はれて来るもので、此れが平等即差別と云ふのである。此の根本なる無我を基礎として、商法を勵み禪の修行してこそ初めて成功する事が出来る。この無我と云ふのは身體の爲に囚れないと云ふ無我である、小さな欲望の爲に囚はれない我と云ふものを、詰り十分道の中へ入れて了へば、苦を打忘れて了ふ。商法でも佛教修行でも斯ふいふ遣方ではなければならぬ。

□心の持ち方一つ

随分若い人は覺えのあることだが、始めて地方から商店へ小僧に入

つた間に、何ほ三枚敷きの尾羽打枯らした、淺間しい境遇であつても、親の側が居心地がよい。それが他人の中へ交つて、番頭さんに叱られ、主人に小言を云はれ、三度の飯を食ふにも、心配して食ふやうな身の上になれば、涙の溢れるほど辛いことがあるだらう。けれども其間が一步一步に尊い修行である。其の間に商機の妙道を修めて行くのである。番頭さんに使はれるのが面倒臭い主人に、叱り飛ばされるのが馬鹿々々しい、と思つたならば、何も出来るものではない、吾々にしてもさうである。道を修めて行くといふ上に於ては、如何なる困難にも堪えるだけの意志といふものがなければならぬ。それだけの決心さえシツカリして居れば、どのやうな困難にも打勝つことが出来る、天龍寺の峨山和尚は常に吾々が困つた顔付き

をすると、斯う云つて訓戒された。願心曠大なれば、富士山も米粒の如きものである。僅なことで心が變つたり、僅なことで悲觀するやうでは駄目だ。全くその通りである、矢張りこれは商業の道を修めて行く者も、左様だらうと思ふ。損をした時には落膽をするけれども自分の決心さへ堅ければ、百萬圓米粒の如し、壹千萬圓猶米粒の如きものである。さういふ考へを持つて行くから、如何なる困難に遭しても、易々とそれを通り抜けて行くことが出来る。それを何とも樂にやらうといふ横着な考を持つて、樂なことばかりを望んで行けば、涙ばかり溢して居らなければならん。世の中で成功したと云ふ人は大抵皆艱難に打堪え得た人で、此の艱難に打堪えるだけの決くのある人は、大概世の中を面白く送つて居る。斯心の如く

艱難に打ち克つた人は過去を振返つて見ても、非常に愉快で、嘗て辛慘の涙をこぼしたことも却て一種の追憶の誇となる、之に反してその決心のシツカリして居らぬものは、僅の事にも、自己の本心まで取失つて全く淺ましい姿になり、平常の口先ばかりの勇氣にも似合はぬやうなお氣の毒な有様になる。事實上さういふ人は決して些くないそんなことでは駄目である。

けれども斯う云ふ種類の人は永劫に成功することは出来ないかと云ふに、そうばかりでもない。何かの機會によつて發奮すると之に依つて一轉機を得、更に堅忍不拔な心を取返すことが出来る。

岐阜縣の中津に松田屋といふ呉服屋があつた。これは木曾の馬込の極く貧乏な家の一人息子で繁藏といふ。親爺は獵師であつた。

何しろ家は貧しい獵師だから、親達は自分の名前も書けないやうな教育のないものだが、せめて子供だけは、どうかして田舎で暮させたくない、と云ふところから永昌寺といふ寺の和尚に、讀書算術を教へて貰つた。そして十一の時、中津の吳服屋に丁稚奉公をすることになつた。矢張り貧乏でこそあれ、十一の時まで親元に居つて可愛がられて居つた身の上だ始て人中へ出て修行するには、なか／＼辛い。番頭さんには辛く當たられ、主人には酷いことも云はれる。少しでも今までの氣を出せば人から憎まれる。それが、どうしても辛抱することが出来ないで、或夜ひそかに店を出て二里の山坂を越へて實家へ逃歸つた。あの邊は御承知の通り雪深いところだ、八寸ばかりの雪の中を一生懸命に逃げて歸つたが、さて、門口まで來れ

ばどうしても中へはいることが出来ない。家を出る時、しみ／＼云はれたことがある。「立派な一人前のものになるか、暇を貰つて數入りの時でなければ歸つてはいけない」、「歸りません」と云つて、堅く誓つた言葉の手前、今斯うして戻つて來たことが知れたならば、お父さんに叱られるのだらうといふので、門口に立つて泣いて居つた這入ろうか這入るまいかと思案に暮れてゐる内に、夜はだん／＼と更けて來る、戸の隙から覗いて見れば、母親は一生懸命に着物を縫ふて居る、親爺は爐の傍に居つたが、「ドレこれから出掛けやうか」といつて、獵師のことだから、狩に行く支度を爲にかゝつた。すると、母親が、「こんな雪の降る寒い晩は休んだ方が宜いでせう」と云ふと、「イヤ／＼さうではない、此間も中津へ行つたなら、繁藏が店

から、風が吹くの荷物を持つて使に行く所、俺の姿を見て涙を溢した、なかく、商法で一人前になるのは一通りのことでない、繁蔵のことを思へば、親の俺は、どうして愚圖くして居ることが出来るやう、悴の罰が當るからどうしてもこれから出掛けることにする、「そうでしたか、そんなに繁が寒い思をして居るのに、私がジツとして居る譯には参りません。私も今夜通し致しても洗濯物を早く縫つて、綿入にして持つて行つてやりますから、お前さんは狩に行つて来て貰ひませう」といつて、親爺は狩の支度をし、母親は縫物に餘念がない、外で聞いて居た繁蔵、胸が一杯になつて、どうしても中へ這入ることが出来ない、「これほどまでに、お父さんやお母さんが、自分のことを心配して下さるのだ、一人前にして貰ふといふこ

とは容易なことでない、少々叩かれたり、叱られたりする位で、腹を立てゝは勿體ない、出来るだけのことは辛抱をして早く一人前になつて、親達に安心させなければならぬ」と思つて、到頭其の門口から引返した如何にも啐啄同時の機じや。それからと云ふものは、敷入にさへ家へ歸らうとはせず辛抱をした。それから、名古屋の支店の方へ出て更に悲しい思をしたが、その時のことは今も忘れませんといつて主人から話をした。今では五六人の人を使つて、安氣にやつて居りますが、實際、商法家にしても、吾々僧侶にしても、樂なことでは大機を體得することは六ヶしいのだ。

□修養を積み

今日では、實際頭を叩くとか、叱りつけることはあるまいけれども
商法の道を修めて商業の立機を體得する一通りの修養といふものは
積まなければならぬ。修養といふものは、善良なる美しい精神を養
ふと云ふことである。だからその點に於ては禪機の修行も、商機の
修行も、その機を一にして居る、何れも至誠流れ出て活動する精神
を養ふといふ點に於ては一つだ。どちらにしても、一通りも二通り
も修養しなければ其の域に到ることは六ヶしい、只樂にして居てい
ける筈はない、然るに、今の四ツ手のランプの中へ落ちた蛇のやう
に、ブブ、ブブ、此方へ行つてもブブブ、彼方へ行つてもブブブ、
向ふへ行つてもブブブ、大阪へ行つてもブブブ、東京へ行つてもブ
ブブと云つてゐるやうでは、それでは駄目だ。艱難に堪え得るだけ

の元氣を養つて、寒中に水泳をするやうな勇氣がなくては、所謂、
町人臭い味ひのある人にはなられまいと思ふ。これは何事でも皆そ
うである。寒稽古の武士道ばかりではない、商法家もさうである。
寒い時に寒いといつては、寒さに恐れ、暑いといつては暑さに恐れ
てゐたならば、年中仕事をするとはいふ。寒いといつて炬燵にもぐ
り、暑いといつて蔭ばかりを捜して居つては際限がない。そんなこ
とでどうして仕事が出来たものか、何事にしても、さう樂なことの
あるものでない。一體、暑いといつたり、寒いといつたりすること
は、こちらが勝手にいふことで、向ふから暑いぞ、そら寒いぞとい
つて來るのではない。寒の入りとは書いてあるけれども、寒の入り
が寒いぞとは書いてない。こちらから寒いと云ふのだ、土用の入り

とは書いてあるけれども、暑いぞといふことは書いてない。こちらから暑いと云ふのだ。だからこちらの心の持ちやう一つでどうにでもなるものである。自分の決心一つに依つて、酷熱の土用でも春の様な心地で暮すことが出来る。寒いといつて困つて居る時でも、秋のやうな氣分で暮すことが出来る。要は自分の心一つだ。決心さへ堅ければどうにでも商機禪機の機關が運轉自在に動くものである。全く商法家の活機も、禪道修行者の活機も玄妙の玄機は同じことである。もう一つ言葉を換へて商機禪機の機關の運轉活動の線路から云へば道だ。道は兩者共通のものであるこの意味から考えると、行誠上人のお歌にもある通り、「梁傳ふ鼠の道も道なれど、誠の道は人の行く道」實際、鼠の行く道も、鼠の這ふ道も道は道であるけれども

も、誠の道だけは人が行くのである。又ある人の歌に

「武藏野のあちらこちらに道あれど、わが行く道は神の正道」。又、後鳥羽天皇のお歌に、

「奥山のおとろが下もふみわけて、道ある世ぞと人に知らせむ」。何れも同じ意味である、要するに、道は同じであつても、その人の力次第によつて、近くこれを得ることも出来れば、遠く求めても得られない場合もある。

金儲けの道を行くのも、捷く行く人は早く儲かる。愚圖々々して居る人は一度は儲かるかも知れんが矢張り鈍い。何れにしても商人が金を儲けるには、先づ算盤をやつて、商業の懸引をやつて、それからでなければ、確實なところは分らないのだ。故に儲かる道はあ

るけれども、捷つこい活機輪の轉ずる人は、愚圖々々して行く人よりは餘程上手に行く。捷つこく上手に行くものには、又、運の神も助けて呉れる。けれども、鈍い奴はいつでも貧乏神と同じところに居る。此の兩般に於ける去就は平素その修養が大切であると云ふことを遺憾なく立證する。奥山のおどろが下をふみわけて、自分が運命を開拓する積りで、道を開いて行かなければ駄目だ。「道は近きにあり」「金は近きにあり」と云ふてウカ／＼さがして居つたつてありはしない。こちらが開いて行くのである。故に、お互商法家にして、佛道修行者にしても、この大機を轉じて行くには、堅き決心を持つて、どんな困難な道も切開いて行くといふ氣勇がなければならぬ、勇氣があれば、如何なる困難な道も、険しい道も易々として行

くことが出来る、實に茲が大切なところである。即ち、一方に宗教的の佛道の力に依つて精神に満足を與へ、一方社會に立つては慊らんほどに、進んで行く。斯ういふ調子に行けばいつかは、禪の機に投じ商の機に投入することが出来るものである。

□足ることを知れ

さて一面には、佛敎でも云ふやうに知足といふことがある。今日は十日で夷さんである。夷さんは福を授ける神様だからといつて西宮へ參つたとして福のかたまりを授かる譯ではない、西宮へ參つたつて弗箱の落ちて居る筈もない。そう云ふ淺薄な考では西宮の夷に限らず、何處の夷さんへ行つても福を下さる筈はない。要は夷様の精神

を授かり自己の修養に資するのが肝心である。即ち清廉寡慾足るを知るといふ夷さんの精神を自己の精神として事を行ふところに無限の福徳が授かるのだ。

□ 不満の習慣

吾子の悪徳てふ書物に何に付けても不満足で、いつも不平ばかり云つて妻や子供にまでも不平を云ふ事を教へた談がある。自分ほど不仕合なもの日本に二人とない。世間の人は羨ましいものだ、常に他人の境遇を褒めちぎり、子供の注意をも其の方にはかり向けさせて居る。「食時の時などには家ではこんな不味いものを食べて居るが、誰某の處では、鯛の吸物だの、鰻の蒲焼などを毎日食べて居る

んだとうだい羨ましい事ぢやないか」と折角の食事もこんな風にして不味くして了ふ。又美しい衣服を着飾つて居る女子などが、店前を通れば、直ちに子供を呼んで、「とうだい、あの子は奇麗な着物を着て居るぢやないか、あれはお前、大變高價なものだ。あの帯だつて十圓や十五圓は出て居んだよ。其處へいくと家の子供は可哀想だ情ないことだ、お前達にも宜いものを着せたいと思つては居るが、着せる譯にいかないんだ、あゝ羨ましい譯ぢやないか。」と

又、向ふから俵に乗つて来る人を見ると、
「金持ちにはなりたいたいもんだね、本統に金持ち程結構なものはない、御前達は不仕合だから、自分の足で歩行かなけりやならない、残念ぢやないか」と云ふ。

又割烹屋などで客が何か旨さうなものを食べて居るのを見るとき。

「御覽、あの料理は大層旨さうだ、だが阿父さんはお金がないから、御前達にあんな御馳走をする事は出来んのだよ」とこんな風でいつも不平不満で日を送る中に子供までが、いつの間にか如何なる事に遭遇つても、更に愉快といふ事を感ぜない様になり、日々快々たる不平の雲に蔽はれて、遂に憂愁な世界から、更に暗黒な死の世界に移されて終るのである。小慾、即知足の所に人生の満足と云ふものはある、何かボロイことがないかと、腕を組んで考へても福の授かりさうな譯はない、この慾の少ないところに幸ひを與へるといふのが、詰り夷様の精神である。夷様にどんな大きな鯛を上げたところで、百萬兩の金を上げたところで、幸ひが授かる譯のものではない

けれども、この慾の少ないところに何とも云へん幸ひと云ふものが得られるのである。總て學問にしても藝術にしても無慾の處に大切な所があるのだ。

我が禪の修行をして禪機に投入せんと欲するならば特に無慾でなければ出来るものではない。書を學んだ金儲けにしよう、早く人に譽られよう、學問をして金儲けにしよう、人に賞められようと云ふのでは、成功も熟達もするものでない、たとへ巧妙に出来ても其の書は何んともなく卑しい所があり、其の學者は人格のない人であると思ふ。

我が禪宗で名高い鐵翁禪師は、清客江稼圃と云ふ畫伯の門に入り、悉くその傳を得、山水花卉ともに妙技に達し、その中でも蘭は天下

に名高くなつて、就いて書を學ぶ者が幾百人の多きに及んだそうであるが、鐵翁和尚其書を教へる前に、必ず垂示していはく、汝ら須らく錢舜學の謂はゆる、「要得無求於世不以毀譽撓懷」の語もてその座右に銘せよ。胸中一點の俗氣を留めずして、能く修練する時は、必ず心手自然に圓熟して遂にその妙に達することを得べし。是れ則ち明來りて闇去るの道なり。と乘示して、それからでなければ決して書を教へなかつたと云ふ、尙書家その人の心操を向上せしむるために楞嚴、維摩、碧岩、又は東波の禪喜などを讀むことを勧めたと云ふ事である。

鐵翁和尚の爐屏に題する語に斯ふいふ事がある「正直にして天理に通じ、慈悲を以て能く人に施す、無欲にして足ることを知る、平日

行事正くして邪なく、物を愛して執せず、俗塵凡情、一點もなき之を古人の風流と謂ふ。世の雅人、今時一人も有るとなし、故に門を閉て人の來訪を許さず、我徳名の高きなし。適意を養ふに拙を以てし、天然を了せむと欲する事、我人の師と爲らず、人我を學ぶは即ち狂人なり。人我が狂を學びて我が心を學ばざるが故也。謂はゆる禪機に投じ宇宙の一大眞理を體得し一點の邪もなく欲もなくなつて初めて畫の妙にも達せられ、成功も熟達もするのである。ひとり學問、美術のみならず商業にしても商機即禪機を達観しなければ成功するものではない。

日本の鑛業を建設された古河市兵衛氏の商機を體得された徑路を考へて見るに、彼は京都近在の岡崎村に生れた、彼の家は代々庄屋を

勤めて居たのである、祖父の時代には、相應の財産があつて、酒造業を手廣く爲つて居たが、彼の父は非生産的の人で、仁侠な肌合であつた爲めに、財産をのこらすつかい盡して、豆腐屋に轉業した、古河市兵衛氏は、此の貧しい時代に、次男として生れたので、物心が付く頃から、貧乏の味を嘗めさせられた。其の上繼母の手にかけられて随分、苦められ、九歳から丁稚奉公に出されたのである。此の小僧時代には、三食共、薄い粥ばかり賑らされたと云ふことである。十一歳の時、家に歸つて、眞面目に豆腐を賣つて歩き、十八歳迄は無名の一少年として、平凡な貧しい生活を送つて居た。けれども此の時代にも流石に彼は無自覺の状態に彷徨せず、發奮の動機を見逃さなかつた事は、他の平凡の少年と異つて居た。彼は學問は

皆無で、小器用な處もない。又小才の利く所もない。こんな點から考へると彼は無能で、鈍物であつた。けれども此の鈍物たる所が、彼の偉大な所で、彼が少年時代に、主家の命を受けて、進物を持參した時、肝心な挨拶の言葉を全然忘れて了つて、それを誤魔化さうとはせず、先方の人に、「途中で忘れて了ひました」と正直に云つて除けた事がある、少年時代の根性は或程度迄變化するものであるが彼の正直な根性は、大人となつてからも、變らなかつたと云つて彼は馬鹿正直ではないが、小利巧に嘘を云ふことは出来ない性分であつた、彼が實業界の大立物となり得たのも此の正直に負ふ所が多い又彼は根氣力が非常に強かつた。世間には、可なりに根氣の強い人があるけれども、彼の根氣力は、無際限な程、量に於ても、質に於

ても大きさと幅とを持つて居つた。それが少年時代から一貫して、益々鐵のやうに頑強なものとなつたのである。彼が叔父の代りに賃金の取立に出かけて、三日間、圍爐裡の側に居て、昆布を喰べ乍ら居催促を續けて到頭、五十兩の金を受取つて歸つたと云ふやうなことは、非凡の根氣力がない以上は、實行し得ることは出来ない。此の根氣力を以て鑛業に従事したのであるから、鑛業が如何に困難なる、事業にしても、彼の根氣には、征服せられざるを得なかつた。遂に彼は此の大根氣の爲に商機に投入したのである。我が禪宗に於ても宇宙の大機に投入しようとするには、此れ以上の大根氣なければ、到底眞理を體得する事は出来ない。大徳寺の開山大灯國師は五條橋下で乞食の内に入つて二十年間修行せられた。其の御弟子であ

る妙心寺の開山關山國師は、修行成熟の後、伊保の山中に入つて、百姓と共に手をひいて七年の間聖體長養と云ふて悟後の修行をせられた。其の他一宗一派の開山とも祖師とも云はれる人は、三食とも薄い湯ばかりの粥を啜つて、二十年三十年と大苦心をして、漸つと宇宙の一大眞理を體得されたのだ、實に大根氣でなければ商機にしても禪機にしても捉へる事は出来るものでない。

或時、市兵衛が白川村へ豆腐を賣りに出かけた際、知人某が向ふから駕に乗つて來たのと衝突した、其の爲め豆腐は滅茶々々になつた乃で「如何して呉れる」と掛合ふと、先方は、却て彼を侮つて、「貴様が悪いのだ」と極め付けて、到頭之を辨償しなかつた、此の事が大變彼を刺戟した、「先方は他人に迷惑を掛けて置き乍ら、却て叱り飛

ばして行き過ぎ、自分は迷惑を掛けられ乍ら、黙つて引込むで居なければならぬのは、畢竟、商賣が卑しいからである、逆も斯う云ふ事をして居たら、頭が上る時がない、何とかして世の中に出て、相當の人物になりたい。是非ならねばならぬ」と發奮した。泉聲、中夜の夜山色夕陽の時所謂啐啄同時の機に投じたのだ。自來、彼は鞍馬の毘沙門に、月參りをして、立身出世を祈るやうになつた、此の發奮が、彼の生涯に、大なる影響を及ぼして居るのである。

十八歳の時、岡崎村を出立して、盛岡の叔父木村利助の家に至つたのは、開運の動機であつた。此の時代彼は叔父の爲め、眞面目に働いた。三日間、貸金の居催促をしたのは、其の時分の事である。又山本某へ貸金五百圓を取立てるため、嚴寒の頃、親不知子不知と云

ふ危険な海岸を徒歩して、怒濤と積雪とに生命を失はんばかりの目に逢つた事さへある、此の危険を冒して、彼は、無事に其の使命を全うした、斯う云ふ風に、彼が根氣宜く眞面目に働く様子が、古河太郎左衛門の眼に留つて、養子に貰はれた、此の太郎左衛門は、既に三人の養子を買つたのであるが、少し氣むづかしい點があるので三人共、失敗に終つた。四人目が市兵衛である。流石に辛抱強い市兵衛は、此の氣むづかしい養父の試験に何の落度もなく及第した。而して養父同様、小野組の店員となつたのである。彼が實業家としての経験も、手腕も、此の間に鍛鍊されたのだ。彼が一旦鑛業を終生の事業と決心してからは、一直線に突進し、鑛業を中心點として働き、遂に商機を體得し實業界の大成者となり遂げたのである。

商法家が商機を體得するも、佛教者が宇宙の眞理を體得するも眞理に於ては違がない。只儲かりさへすればよいと云ふ様な利慾ばかりに迷ふて居る人は、決して金儲の眞理即商機に投ずる事は出来ない。上は陛下の御爲め、下國民の利益を圖らんが爲と、商法の道を行くといふ決心を持つて行けば、根柢のある楽しい生活をする事が出来る。左様な決心で以て商法の道を辿つて行くなれば、設令少し位の損失があつても、平氣で居ることが出来る、利益と損害とは時の運であるからそれは已むを得ない。只謙の徳を以て、一方佛道の修行によつて、無我の根柢から割出して行きさへするならば、自然にその目的が達せられる即ちいつかは必ず商機即禪機に投入し一大成功をする事が出来るのである。

□成功の秘訣は學問上にて得らるゝものにあらず

禪宗にしても商業にしても成功の秘訣の多くは、文學上や學校などで教ゆる事の出来ないものが多いのである。故に青年たるものが、商業學校を出た、高等商業を卒業したと云つて、それで以て成功的徑路を創むるに必要な資格を養ひ得たりと云ふ事は出来ない、世上には手勢、常識等に伴へる人的吸引力、方法、機敏などのどうしても記述の出来ない一種微妙な性質がある、此れは學校や文字では修める事は出来ないが、大事業の成果は主もに此の諸性質から生れるのである。寫眞師でも之れを寫す事は出来ない。傳記家も之を記述

する事は出来ない。けれども成功には之が尤も必要なる條件である。年々商業學を研めて高等の學校を出るものは頗る多い。此等の人は商法の原則に通曉し商法人として縦横の辯を弄する事は出来るけれども、而も商法家として失敗する所以は、正當な時に正當な事を行はねばならない或る説明する事の出来ないものを缺いて居るからである。多數の人が商法家として失敗するのは、第一に圓満な人でないからである。彼等は、書を読み商法の原則にも通曉して居るが人をして成功せしむべき前述の性質を帯びた徳性を缺いて居る故に一家を支持し業務を経営して行く上に於て多大の困難を嘗めねばならぬ。禪宗の修行などに能く言ふところの水を呑んで冷暖自知でなければ、眞の水の味、即ち禪の妙味は得られない、如何に砂糖が甘

いと云つた所で、砂糖をなめた人でなければ其の甘きを知る事は出来ない所謂禪機に投入せなければ禪味は知る事が出来ない。商法家にしても同様學問上ばかりでは商法の手勢と云ふものは得られない。實驗して初めて其の手勢即ち商機と云ふものを體得する事が出来るのである。故に須らく實際に當り冷暖自知して、好機會を捕ふるだけの能力を養はなければならぬ。

□ 大 事 業 成 功 の 動 機

大 事 業 成 就 の 動 機 と 云 ぶ も の を 考 へ て 見 る に、 世 界 に 於 け る 大 事 業 の 殆 んど 總 て が、「 必 要 」 と 云 ぶ 嚴 格 な 刺 激 の 下 に あ つ た 人 の 手 に 成 功 せ ら れ た 事 は 最 も 著 し い 事 實 で あ る 。 之 に 反 對 に 事 業 と 云 ぶ も の

困難に苦しんで居る様な人や、又は必要でふ刺激の下に居ない人に依つて爲された事は殆んど稀である。容易であつて、生活の苦しみを知らないと言ふ様な人に於ては自然に其の精力を抜き去るものである。「必要」と言ふ事は勉強以外に奮勵を招いて、常に其れを持久的たらしむるばかりでなく、一時たりとも愉快を來たすものである。「必要」と言ふ人生の刺激が漸く影を隠す様になれば、人は前日よりも生活の方法に於て漸次容易なる事を感じ、前日の様に事業に固着して頑強に奮勵せなくともよいと言ふ考へを起すものであるが、此れが商法家として事をなすもの、一大危機の伏在する時であろうと思ふ。吾禪僧も亦然り。此の時、此の刹那こそ、鞏固な決心、偉大な忍耐を以て、彼の、「必要」の刺激の肉薄し、希望の光明の前途に

横はつて居る時と同じ氣力と勇氣とを以て、猛斷決行する勇猛心がなければ禪機を捉へることは出来ぬ。商機の體得も亦然りで、此の危期の一刹那に大自覺と大勇猛心を起さなければ竟に恢復すべからざる苦境に墮つるに至る。

凡そ人の精力は先天的に大きいものもあれば、又小さいものもあるけれども如何に天才と雖も其精力を、收めて置いて使用する事を怠つて居れば、其の材を伸すことは出来ない。之に反して如何に鈍才者と雖度々此の才を使用するならば、必ず或る程度までは發達させる事を得るものである。彼の一藝一技に専らなるもの、其の技術に驚くべき微妙の域に達するのによく見る處である。必竟是れは同一の事に専一なりし結果である。「カーライル」曰く「最も弱き人も一

の目的を定めて全力を之に集注せば如何なる業にても之をなし能ふ
反之最も強き者と雖も其精力を多事に分散して使用すれば何業に
てもなし能はざるなり。」と彼の滴々たる水も其墜つる處を違へなん
だならば、堅固なる岩石をも尙ほよく穿つ事が出来る。けれども、
急湍激流其聲雷の如きものでも、一點に向つて奔突することがか
つたならば何等の痕迹をも岩上に留める事は出来ない。故に世に名
を成さんとする程のものは、自己が天稟の才能に適應せる事業に向
つて、宜しく惜む所なく滿幅の精力を集注せねば目的を達すること
能はぬ。苟も一疑でも其の間に生じ、一毫でも不安の心があれば、
其の爲に活力を根抵から弛緩してしまふに至る。

そうして其の精力集注の秘訣は心行一致にある事を忘れてはならぬ

孟子曰く「此に二人の學生ありて同じく讀書を習へりとするに、一
人は餘念なく全精力を集注して之を學び、他の一人も同じく學ぶと
雖も、其の心に思ふ様、今日は天氣もよし野に出でて空飛ぶ鳥を狩
りすれば、嘸ぞ面白からうと、一日かくの如く、一年かくの如く、
十年かくの如くば如何」と。すべて一事業を成功せんと思ふならば先
づ第一に其の全力を捧げなければならぬ。若し酒造家たらんと欲す
れば則ち、全力を酒造業に注ぎ入れるのである。所謂禪宗でよく云
ふ公案三昧にならなければ駄目だ。其の時始めて日本第一の酒造家
たることを望むべきである。酒造家にも焼芋屋にも又呉服屋にも轉
業する様では到底大成功は六ヶしいと思ふ。成功の秘訣は一に此に
ある。惟ふに我が商人にして、始から商機即禪機を達観して實業に

從事して居る人は必ず大成功の人であると思ふことができる。如何に商機を體得せん、泉聲中夜の後、山色夕陽の時である。如何が、禪機を體得せん、泉聲中夜の後、山色夕陽の時である。

第八 裸体の光明

□無心無我

祐は昭和二年一月釋尊の降誕せられた跡を尋ねて印度へ参りました、世界の聖者降誕の地も、今日では見る影もない僅かな鎮守の森に等しきものとなつて居ります、その森の中には、摩耶堂、阿育王の塔などがあつて、それも聖地を記念する程宏壯なものではなく、

阿育王の石柱の尖端は崩落して、碑文を漸く見るに堪ゆる位であります。

斯く聖地ルンビニーの地を訪ねました私は、この四月八日を記念する爲め、今回は降誕に因つて裸体の光明と題してお話し致します。一般に出世年代に就いて澤山の異説があり、又出世の日月にも異論があるやうであります、佛本生經に依りますと、二月八日であり本起經には四月八日、佛所行經には同じく四月八日とあります、私は爰に四月八日の説に従ひます、四月八日は太陽曆に依りますと五月頃になります、印度を一般に熱帯の地と申して居りますけれども、ルンビニーの地方に行きますと、一月頃ではありましたが餘程冷しいので、此頃の我が日本の京阪地方の氣候と大差がありません、

實に花咲き鳥歌ふとも申す頃でした、年代は西暦紀元前五百六十七年頃とされて居ります。

今より二千四百九十五年の昔、此の世に孤々の聲を擧げた一童子がありました、國家の尊敬と人民の崇拜とを一身に集め、瑞祥の兆、人天の歡喜の限りを盡して壽かれた降童子、然も森羅萬象に至るまでありとあらゆる者の苦痛を擔つてゐながら、悠然として天上天下唯我獨尊に聲明しつゝ一指は天に一指は地に、人夫の救済を誓願しつゝ産湯に浴せられたのであります。

或る人はこの周行徒步の言句は後人の作であると申しますが、その議論は探索するだけ無駄であります、釋尊が生れられたそのことが、結果からして當然天上天下唯我獨尊の人格者であつたから、よ

し釋尊が申さなくても唯我獨尊であります。

又他面から観るに、生まれた時程純情なものはありません無心無我なものであります、孤々の聲に差別はなく、従つて平等の理想もありません、比較して考へることのない赤子に向つて權利義務を主張する人はありません、道路に赤子が残されて居た際にそれを無理に轢き倒して進む自動車もなければ、叱り飛ばして行く自動車の運転手もありません、主觀もなければ客觀もなく、愛もなく憎しみもない者に善惡罪過を申す人はありません。

斯くてこそ悉達太子の孤々の聲に意義があり、光明があるのであります。

□法の上に人生なし

少くとも我々が雑然としたこの社會から抜け出で、生れ乍らの天真獨明の自己に歸り無我の利に復りたいものであります、對象がなければ比較すべきものがありません、我れを捨てた者には苦しみはありません、そんなことを申せば社會の生存から無視せられると申される方があるかも知れませんが、物質に執着する人の世界には物質しかありません、その人は物質のために苦しんで居ります、そのやうな人に、私は赤子の心に還つて欲しいと申すのであります、執着を捨てた心、忘執差別を離れた思惟、漢來れば漢を現し、胡來れば胡を現すに自由な魂の所有者になりたいものです、これこそ裸

の生活であります、裸の人が物を盗まれた例はありません、裸の家に昔から盗人の入つた話は聞きませんが、然しながら物質的に申すのではなく、精神的方面を申すのであつて、現代の社會に生活するには物質を無視しては生命の保證がありません、物質文化の趨勢に順應することが出来ません、物質的に求むることも可であります、與へられた物質に執着することは、自己破壊の道程であります、忘執愛着するから罪悪を作り苦しみの海に沈倫するのであります、西洋の學者などが、よく佛教を偶像の宗教と申すのでありますが、佛教程偶像を超越した唯心的な宗教はありません、即ち釋尊は無相を説いて居られます、釋尊が修業觀にも諸法の無我を説いて空無なることを示して居られます。

私共が我、俺しと申し、自己の體を中心にして、他に向つて眉逆だて、目を傍立てるのでありますが、此の私が死んだら最早私と云ふ個體はなくなり、又精神的にも此の私が世相を見て、あると思ふからあるのでありますが、それは唯自己の假想に過ぎないのであつて、夢なるものであります、斃れば杳として消息はありません。私がこの黒板に「イ」と書きますに「イ」が何處にありませう、「ノ」と「ー」が組み合はされて「イ」と讀むと約束したに過ぎません、その約束は人が互にした、その約束の根本はと考へて行くと捉へやうがなくなります。

法の上には人生はありません、黒板上の「イ」の字も榮華に等しいものであります、色受想行識の五蘊が去つては宇宙に歸へる、此れ

が本來の姿ではありませんか、釋尊は故に無相と説かれたのであります、誠に佛教は偶像崇拜の教ではありません。有形の體をして無相の眞實を知るが本義であります。

□唯心の根源

今日は佛像を崇拜するのでありますが、その昔佛滅直後に於ては菩提樹を拜したものであつて、釋尊が此の木の下で大覺を成せられたものであるから、大覺を得やうとするものは先づ夫れに對する對象を捕へやうとして、菩提樹を拜したものであつて、菩提樹を切つたものは、罪人とされたのは人間としてこの釋尊の救済の慈悲を解せぬものであるとされ釋尊が此の樹の下で刻苦精通の成果の如何に

人類の福祉を齎らされたかを、想像するものはそとろにこれに對する尊敬心を起したものであります。

繪畫でも彫刻でも、三十二相、八十種好を書き示すことの出來ない時代は僅かに釋尊に縁のあるものに觸れて、親しく釋尊を追慕したものであります。

或は金剛坐を拜し、又佛足跡を拜したものであります、後世彫刻術を知り、初めてケンタラ時代に佛像を作つたものだと云ふことが眞説らしい、希臘から彫刻偶像崇拜の形式が傳つてから、印度では像佛が普及せられ、ケプタ時代に盛んになつたものだと云ふのであります、これは釋尊に親しく謁んとする象徴であつて、印度の拜火教の如きとは全然意味を異にして居ます、釋尊の精神から申して佛

教は偶像教ではなく人世は夢幻泡影の如く、憂執迷惑の惱みから去り、唯心の根源に到達すべく教へられたのであります。

□悉達太子の念願

淨飯王が天地にも代へ難く、慈しみ育てられて太子悉達は秀才の譽れ高く聖天子の風格を備へられて居たが、波羅門の行者、アシタ仙人の占ひし如く轉輪聖王を望まれず、一切智を成すに出家こそ望れてゐたのであります、古く印度には耕祭と云ふのがありました、氣候温和である北印度は五穀も豊成に熟るから、當然耕祭も盛んに行はれたものでありませう。太子は十八才のとき、この耕祭を見に出かけられた、面前にあつて一頭の牛が斃死したのであります。又

小虫は馬に食はれ、小鳥は猛獸に捕はれ、弱肉強食の生存競争は遂に太子を世の悲惨な無常なることを印象づけたのであります、生きることは實に罪惡の多きことであり、呪はしきことである、如何にしても恩愛憎惡の波瀾を心から去り、靜かに人生の諦觀への生涯を開拓したく念願せられてゐた、一方淨飯王は太子出家せば人夫救濟の教を説かれしが、今齡老ひてその機會に接することの出来ないのを悲しく思ひ、宮女侍女數多侍らし麗はしき天壁城王の愛娘ヤシヨダラ姫を婚らしめて歡樂に太子の心を留めやうとされたが、却つて事毎に無常觀を起されたのであります、晝は宮女が妖窈の極みで太子に侍くかと思へば、夜は醜の限りの淺間しき容に、早く王宮を逃れまほしく決心せられ、西曆紀元前五百三十七年の七月一日の夜半

母夫人の胸深く抱かれ靜かな夢のまごろみに、天使の如き愛兒羅脈羅に最後の一瞥を興へられ、恩愛を捨て無爲に入り玉ふ觀念雄々しくも遂に決然金閨を脱け出でられたのであります、實に二十九才の御齡で、日頃愛馬せられた、カンタカに乗り從者シャノクに手綱をとらしめて王宮を後に壇特山を指して行かれました。麓に到着するや、黒髪を切つて王宮へ持ち歸つて形見に渡す可く首飾り、服等總てを從者に渡して、仙衣を着けた太子は山深く登つて行かれたのであります。

□天地に一貫となれ

近くは大燈、關山國師が或は四條河原に行乞せられ、或は伊深の

里に牛を曳かれてこそ、あれ丈けの説法が出来たと同じく、ヘレナスの畔、苦樂林の陰實に骨を刻み、肉を切る如き修業と、行乞の體驗が思索を生み、思索が行狀に現れ、千載に輝く歴史の人、聖者となられたと思はれます、財産に満足するものは、財産となられたと思はれます、財産に満足するものは、財産より出づることが出来ず愛想に盲目なるものは受慾の爲めに出離することが出来ないと同じく富を捨て、愛慾を去り、無爲の修養、行乞の體驗よりして斯くも尊き慈悲の教を説き、人情の機微に接せられたのであります。

苦勞のないものは、自分の知識を磨くことすら出来ないのです、正覺の後の釋尊は、父淨飯王の處に行かれるのに靴にも召されず、長き道を旅され行乞其もの姿は、救済の誓願、慈悲の教そ

のまゝの表現であります。廣大無邊な慈悲心の體現でありまじやう、無常を感じ世相に歎かれた釋尊を感傷的な人であつたと申すならば、それは餘りに人間的に見たものでありませう、然し乍らこの道を求むる爲めには深き因縁と、周到な觀察と、強き決心と且は厚き宗教的信念が必要であります、そして執着を去り、生れ乍らの内外共に無一物となり、總てのものに求め得られる無所有の本體に歸り、天地に一貫となりて修業しなくてはなりません。

釋尊の一代を考へて見ますに、ルンビニーの花園に聖誕せられて河畔の曉に正覺し、沙羅雙樹の下に涅槃に入られ、完全に肉體は空無に歸して寂滅せられました、釋尊滅後の今日まで、釋尊の精神は尙輝いて居るのであります、この宇宙に無限大に包攝せられて居

るのであつて、その強さは私等。目には見ることが出来ません、恐らく永遠の過去より無限の未来へ、不斷の光明を興へて居られます。

□捉はれぬ心地

現在の社會が物質的に便利となり、肉體的には感覺的となつて一日でも長命を保つことが冀はしくなりました、物質文化の進展は漸くに感覺的に或は動物的になり、人を動物的慾望の爲め誘致せなければ止まない様になり、財物を頼んでは益々輕佻な氣風となり、愛着を深くし、妄執を續けなければ生きてゐられない様になりました、結極長壽は愛着心の満足を續け、底知れぬ淵に浮沈してゐたい慾望の外ありません、この人達に申させるならば、財産家など生存價値

が多く、幸福を多分に持つて居ると云ふのでありませうが、然し實際は逆比例に行くことが多いのであります、金があれば心配になるし、財物があれば夜も寝られないでせう、社會は金融に依つて轉置してゐますから金も結構でありませうが、望むらくは捉はれぬ心地でありたいものであります、「イ」の字が存在せぬ如くに、裸の氣分であつたら金庫の番人となつて、青ざめた半病人とならなくて濟むでありませう。茲に天上天下唯我獨尊の意義があり、裸體の光明ある所以であります。

第九 布 大 鼓

感情の激動

物本末あり、事終始あり、總ての仕事に輕重を考へ先後緩急を考へて、先んずることと後んずることと、緩急寛嚴の妙は三度の飯の水加減でも了解る、お菜の鹽加減でも、丈夫修養熟練實習が必要であることが知られる。

雨下駄などを我々には何とも思はずに履いて居るが、あの下駄の齒が緩ならず緊ならず、キチンと入れてあると云ふ處に注意しなくてはならぬ、其の加減は教へられるものではない、緩緊の妙も亦以て心傳心と云ふの外はない。

静かな池へ小石を一つ投げこめば投げた小石の力相應の波紋を生ずる、大きければ大きいなり、小さければ弱いなりに、一應は其波紋がすみからすみまで行き渡つてから消えて無くなるものだ。さて静かに消えたその後には小石も見えず波紋も残らぬ。人生の出來事も皆是れだ、此の波紋の爲にあわてたものは沈没したり問題を起したりする、すむのすまぬの善い悪いの他人の我の感情が激動するのには、静かな心地の池の水に小石を投げこんだやうなものだ、しかし感情の激動はあつても時間がたてば又もとの静かな池の水の状態になつて、何の爲めに憤つたのか泣いたのか分らぬことがある、小石をなげ込まれても、さゞ波の静まるのを待つてから言ふべきことを云ひ、聞くべきことを聞くやうに致すべきである。

今いそいで説明せずとも了解せらるゝ時期が來れば明かになるものである、暗夜に提燈をつけたとてすみからすみまで明くはならぬ旭日が出づれば縁の下まで見透される。

□天真の靈は誤魔化せぬ

眞面目な學者たらんとする人はおだてられても講演などに行くべからず、如何におだてられても新聞や雑誌に寄稿すべからず、一人でも多くの人に名を知らるゝだけ自己の生命をうすくして引きのばされ名を知る人が一人ふえればそれだけ自己の徳がウスベラになる、宗教家は特にその心得が必要である。

道人の如きは紙よりもうすき輕薄なる坊主となり下つたことを恥

づるものである、徳の光にて自然に知られし大徳は別として、講演や新聞雑誌に賣讀賣文の結果名を知られたとは如何にも淺薄であると思ふ。衆愚は誤魔化しても天真の己靈は誤魔化せぬから、血を分けた眞實の親子でさへ、名利のためには冷酷な性質をあらはす事もあるものだといふ事を注意して人と交際する必要がある、犬の子なごでも平常はむつまじいけれども菓子くわしの片われでも見れば咬み合ふて争ふやうなものだ。

□努力と眞面目

坊さんは法要をつとめて布施をうけ報謝を貰ふて生活するから商人も同様だと輕蔑する人がある、大臣も年俸と云ふ布施、代議士も

歳費と云ふ布施を貰つて生活して行くとすれば乞食坊主も大臣も代議士も同様と云はねばならぬ、學者も月給や原稿料で生活して行くとすれば、經讀んで生活する乞食坊主に似て居る、只努力と眞面目さの分量に依つて僧俗共に社會から輕蔑され又尊敬を受ける度が定まる。

世界中に乃公一人であればよかりそうにも思はれるが、寥々たる天地の間にタツタ一人ではたまらぬ、竹に雀、男に女、人に金がなければ天下は泰平ちやと云はれるが、しかし尋常一様な窓前の月も僅かに梅花あれば又興を添ふ。

自覺とか目醒めよとか云ふよりも迷へ酔へ眠れと勧めねばならぬ時節になつた、坊主も佛法に酔ひ佛法に迷信し、佛法の爲めに眠ら

るゝものは、むしろ幸福者である、今の坊主は佛法は知らねど科學は知つて居る、日本や外國の地理歴史は知つて居つても、佛や祖師の事績は知らぬ、何やら全集の小説は暗誦しても和譯の經典も讀まぬ坊主が多い。

□「繪のやうだ」

佛のことを如來と云ふが、如來とは讀んで字の如く來るが如しである、來るのでも來たのでもない、來るやうだと云ふのである、此のやうだと云ふ處に妙がある、味がある、昔三代目宗十郎が大阪の中芝居に實物の馬を舞臺に用ゐて一時は觀客の喝采を得たことがあつたが、七八日目になつて馬が花道の眞中で放尿したので大騒ぎ

となり、座元から町奉行へ始末書を出して芝居は三日間も遠慮休場と云ふ失態を演じたが、實物の馬を見るなら何も芝居へ行くまでもない、又如何に役者が馬を乗り廻した處で、それは高い木戸錢を拂つて見物に行く程の價打はない、つまり不細工な作り物の馬體の中に所謂脚と稱する役目のもの二人あつて、一人は前脚となり一人は後脚となつて、そうして馬體をかついでの動作が本當の馬らしく馬のやうに見えるので、そこに芝居があり藝術があるのである、須磨や明石の絶景を褒めるのに、全く繪のやうだと云ひ、美人の盛装したのを賞讃するのにも亦繪のやうだと云ふ、是が

「あなたは眞に繪だ」

といつたのでは絶對の褒め言葉とはならない、繪のやうだと云ふの

で美人が益々活きた美人となるのである、須磨や明石も繪ではつまらない、繪のやうだからよいのである。

□英雄赤子の心を失せず

石室の善導和尚の示案の中に

「十六觀行の中、嬰兒門を最とす、哆々和和の時を學道の人の分別取捨の心を離るゝに喩ふ、故に嬰兒の讚歎して之れを取るべし、若し嬰兒是れ道と云はゞ、今時の人錯つて會せん」

と云ふてある、英雄は赤子の心を失はずと云ふは、英雄は赤子であることではない、赤子のやうだと云ふのである、此のやうだと云ふことが、本當に手に入れば我が事畢ると云ふてもよい、そ

れは妙である、不思議である、冷暖自知の外はない。

汽車の窓にはカチャンと力を入れて一ときめ、しつかりきめぬと何遍でもガラ／＼と後戻りをする戸がある。

「引つか、ろう、はまろう」

とかけ金が待つて居つても、ガチャンと最後に一ときめ力を入れる元気がなければ、如何に静かにカラ／＼やつても駄目だ、人と人との中もそうだ、

「左様然らば、御道理」

で静かにカラカラフニヤ／＼では決してきまらぬ、是非カチャンと出入の度ごとにやることを忘れてはならぬ。

一切の諸法は皆純一無雜である、砂糖は甘くて純一無雜、唐辛は

辛くて純一無雜、若し是の心を了得すれば隨時に隨處に著衣喫飲、長養聖胎任運に時を過して一々純一無雜、一々清白梵行である、悲しい哉凡夫は、甘ければ甘いと思想し、辛ければ辛いと思念するものである。(禪宗)

第十 萬法唯一心、心外無別法

□法界性

「萬法唯一心、心外無別法」

といふ言葉に付て杜撰な御話しを致します、この言葉は、
「唯識論」

にあつた言葉と思ひます、かう云ふやうな意味の言葉は、佛教には孰れの所にも見えるのでありまして、

「華嚴經」にも、

「人了解三世一切、應歡法界性、一切唯界性であります、それで、
「法界性」

といふことは、唯、佛教の有の言葉のやうに思はれて面白くない
法界性とは森羅万象すべてのことに對して云ふので、これは萬法といふと同じ意味です、法界は何を指すかと云へば、天を指、森羅萬象ことごとくこの法界の中に入つて居ります、それで、

「三世一切佛」

といふ澤山のやうであるが、佛の本性を知らんとしたならば、正

に法界の本性を觀るべし、法界の本性と觀すれば一切悉く自分の心から達すと云ふのである、これを

「破地獄の偈」

といひます、これは子供の虫封じのお禁厭にも、これを六通り計り書いてやると、虫の病はこれでお了ひになると書いてあります、さうして、これを巽の所に釘で打ちつけて置けば、子供の虫が癒ると云ふ傳説があります、これは私の處でもやりますので、破地獄の偈はこの地獄を破ると云ふことで、言ひ換れば

「萬法唯一心、心外無別法」

と云ふことになるのであります、猶法界性はごんなものかと云ふと、一例をいふと淨土眞宗では南無阿彌陀佛、日蓮宗では南無妙法

蓮華經、禪宗では雙手の聲であります、雙手の聲を聞いて来たとか、本来の面目を見て来いとか又は南無阿彌陀佛、南無妙法蓮華經によりて安心せよと云ふは、法界性を體得するまでの方便に過ぎぬのであります。

□一切唯心造

この心の持ち方に由つて、鬼にも蛇にも神にも佛にもなるので、茲にこれだけおいでになります、各皆引受けて居られる所の與へられたる、命せられたる職分があつて、又それぞれその上官に監督されて居るのであるが、誠實に表裏なく自分の職分を忠實に盡くして居る人は監督官所から假令鐵道總裁が來られても、平然として貴

方がたは頼つて居られるに違ひない、又驛長さん、其他助役さんの下に居つて働いて居る人が命せられた職分に忠實に行つて居れば、何時如何なる時に、その仕事を見られても何ともない、また見て貰ひたいと思ふ、しかし一寸誤魔化しをやつて御覽なさい、若し誤魔化しをやつて居れば、上の人の眼の玉が恐ろしく見へ、小さい男が大きな男に見へる、學生なども試験の時は先生が大きく見ると云ふが誤魔化して通らうとすると、さうだろうと思ふ、こゝに一人の巡查が出て来て泥棒した者が先きに立つて居り、又眞面目に勤めて金の千圓も持つて居るものが向ふに立つて居ると二人の人の感想は何うであらう、一人は悪い處に巡查が出て来たと思ひ、何うかしてあの巡查に見られないやうにしやうと考へる、又一人は宜い所へ巡查

が来て呉れたなるべく彼の巡査と一緒に往つて貰ひたいと思ふ、懐
中に誤魔化して金を持つて居る人の巡査に對する感想と、眞面目に
働いて金を持つて居る人の感想とは、同じ一人の巡査を佛に見る人
もあり、鬼に見る人もある。

「法界性は唯心の造る所なしと観すべし」

で地獄も極樂も皆悉く心だ、世間は金だと云ふが佛の教へは物質
の上からいつてもさうで、これだけの集合所が出来たのでも、天か
ら降つたものでなく、地から沸いた物でもなし、人が設計をしてこ
れが出来たのである、この設計も唯手で線を引いたと思へば間違ひ
で、手ではない心が引いたのだ、この眼に見へない心で計畫して夫
れが形の上に現はれたので、どんな物でも唯心論から云つたら一切

唯心造ならざるはなしで、音に佛の心計りではない、一切のもの皆
唯心ならざるはなしであります。

かの人は大變に金を作つたと云へば、それは働いたからである、
働きは何かと云へばこの心である、金持も貧乏人も皆心で出世をす
るのも、何時までたつても出世をせぬのも心であります。地獄で暮
すも強ち形は變らぬでも、現に自分が就業してゐる仕事を地獄の釜
の焦付やうな心で暮してゐる人もあり、又日々愉快に暮してゐる人
もある、同じ一つの月でも憐れな境遇に居る人の見方と愉快な心持
である人の見方とは必ず違ふに相違ない。西行法師の歌に、
「月見れば千々にものこそ悲しけれ、わが身一つの秋にあらねど」
とある、親に訣れ、夫に訣れ若しくは、愛しい妻子に訣れ、萬里天

涯の孤客となつて、磨き上げた月を見た時の心はどんなでありませう。

去年の秋は清涼殿で友達と共に月を見て詩や歌を作つて楽しんで、今は太宰府に於て獨り寂しくこの月に對するは實に愁思斷腸の感に堪へない、同じ月だけれども、かくの如き順境界にゐる人と、逆境にある人との見方は感想が違ひます、博多の歌人は、

「我れ酔へり今や瓢を鼓にと、うちてや月の影に出すらん」

と詠んだ、同じ一つの月に對しても瓢箪の代りにして月を賞で愛するといふ感想と、

「月見れば千々にものこそ悲しけれ、わが身一つの秋にあらねど」といふのと同じ一つの月に對してもかくの如き相違があります、

人事すべてこの月一つに對する感想と同じである、喜んで襤褸の着物を着て行く人も皆心からであると思ふ。

□各自異つた働きの妙味

法相宗の教義に心の働きを五位反法といふ風に分類してあるが、結論は萬法唯一心である、それで例へば蛇繩麻の三性といつて、最初月夜に道を歩いてゐると、蛇がをつた、驚いてよく／＼見たら繩であつた、而してそれを繩と見て間違ひないかといふと世の人は繩といふまでは判つてゐる、もう一つその繩を調べて見ると繩は未だ本體ではない……繩はまだ法界性とはいへぬ、繩は因縁によつて出来た假和合の相であつて、繩の實體はもう一つ解いて見ると麻であ

る、それは一つの麻であるが細くすれば麻糸ともなり、太くすれば細引ともなる、繩がその物の本体でない、繩と見たのは稍學問、稍智識が出来て社會を観察して繩と見たのであるが、これは稍賢人の見方が大抵の人は蛇と見て居る、けれども夫れは幻のやうなもので、悲しいと見るも間違ひ、嬉しいと見ると間違ひである。人生は喜んだり悲しんだりするのが當然であると達観するのは、その繩と見たと同じで、もう一步進んで達観すると、喜びも嘘、悲しみも嘘となり、始めて心に法界性といふことが判るのであります。

かういふやうな例をもつて、釋迦如來は人間の迷を蛇繩麻の三つとお示しになつたのである、繩まで見た人は稍賢い人で、多くの人隱病な人は蛇に囚はれてゐる、誰れでも死ぬ事を厭ふが、生れた物

は死ぬ儲けた物は損をするに決つてゐる、儲けたことばかり見て居るのは恰も世の中を蛇と見て居るので、蛇と見てゐるのは當らない、繩と見たのが稍學問の力で、學問の力で繩まで觀察するが、その繩に就て本体を達観すると麻である、又太くし細くするに従つてその用途が違ふといふことが判るので、これは宗教的修養を積んでこねばこれを達観するといふことが六つかしいのであります。

それで形の繩に執着してゐることを分明に説明すれば、喩はこの扇子を以つて例として説明して見んに、扇子は竹と紙と糊とで出来て居り、今も竹と紙と糊とで出来てゐる、提灯も同じくそうであり、それなればこの竹と紙と糊とで出来たものなれば、これを取り替へることが出来るかといふと、そうはいかぬ………本性は竹と

紙と糊とであるが、それは因縁に由つて形が現はれて来るのであります、これを體相用といふので、本體は竹と紙と糊とであるが、因縁に因り、扇子となり傘となり提灯となり、各々其の形相が現はれて来る、而してその現れた形に由りて働きが各々違ふのであります、本性は同じであるが姿形が變ると働きが違ふので、人間と雖も同じことで、上は鐵道大臣より驛長殿、助役殿、又ボーイさんも驛夫さんも人間といふ事は同じであるが、驛長、助役といふ様に姿が變るとそれ丈の働きが違ふ人間と云ふ以上は親も子供も同じである、上は天子様より下は乞食に至るまで同じ人間であるが、その名前によつて形が變ると、丁度扇子や傘と同じで働きが違ふて來ます、雨が降り出した扇子を御持ちなさい、之は傘と扇子とは同じことだから

れを扇子を御持ちなさいといはれて困る、元が同じだからといふので傘を手に持つて扇子の代りにし、

「新年お目出度う」

で年始に歩く譯には不可ない、竹と紙と糊とだから、提灯も扇子も同じだといふて、まさか提灯を腰にさし、夏になつて扇子の代りにふりまはす譯にも行くまい、元は同じだが姿が變れば變るだけ、變つた働きをせねばならぬ、故に法界性を觀察すれば、扇子は提灯を羨む必要もなし、又提灯といふ姿に變つて來た物が傘を羨む必要もない、法界性を觀察すれば因縁によつて扇子といふ姿が現れ、傘といふ姿が現れ、提灯といふ姿が現れ、各自異なつた働きをなす所に妙味があるのであります。

□地 水 火 風

「引きよせて結べば柴の庵なり、解くれば元の野原なりけり」
といふは、これは繩を唯達觀した人でもう一つ達觀すると
「引きよせて結べば柴の庵なり、解かねど元の野原なりけり」
で、何もそのまゝ合してあるとしたら、彼此羨む必要はない、吾
々の身體は佛教では地水火風の四つからなつて居るといふ、元素な
ご細まかいことはいはぬ、吾々の身體は地だと云ふ、鼻汁とか小便
とか血液といふのが水で、身體の暖かいのは火で、手足が動くのは
風之力だといふ、それで私共身體のわるい事を四大不調といひ、僧
侶が文通に病氣見舞などの言葉に昔から四大不調の趣きなどと能く

書きます、それで病氣になるのは、即ち熱の發した時は火大の調和
を失つたのである、手足の動かぬやうになつたのは風火の調和を失
つたので、無暗に鼻汁や小便の出るは水火の調和を失つたのである、
筋肉の故障を來した時は地火の調和を失つたのである、故に病氣を
四大不調と云ふのであります、佛教では吾々の身體を地水火風の四
つだといひ廣い世界も地水火風の四つだといふ、して見ると廣いこ
の世界の中に因縁に由つて斯んな身體をば拵へて出來て、これは私
の身體であると誰が決めたか、これを考へて見ると神様や佛様が惡
戯に吾々を作つたと思へば迷惑だが、さう思ふのが間違ひで、それ
は此方から土と火と風と水を持つて來てグル／＼團子の様に捏ねて、
これが飯田義一、これが花村芳藏、これが間宮英宗であると云ふこ

どになり、これが私の身體であるといふて捏り出すやうなもので、全世界も地水火風の四つである、こうしてこれが我身體であると決めたのは何時頃かといふと、何時頃とも判らぬ、お父さんやお母さんが證明して呉れるから判るが、それでないはどうしても自分が出たのか判らぬ、

木の股から出て来たなどと威張つてゐる人もあるが出る時に

「我は何某でござる」

と名乗て出て来た人はない、この無限の地水火風の中からたつた五尺の身體が出て来てこれが私の身體であると云つて心配してゐる、さうしてこの自分の胸體を保存せんが爲めにいろ／＼と苦心するが、それはこの繩がさまざまに世に表現してゐると同じに、その本體を

確かむる時は元の麻繩だから、乞食の地水火風も、天子様の地水火風も同じで或は身體の暖か味でも、手足の動き方でも、その他すべて同じ事である、して見ると地水火風のこの四つの働きは、何れも無限大の所から、小さな五尺の身體が出来、これが私の身體と暫く妄執してゐるが、實は麻である、地水火風の本體からいふと借物である、さういふと借物なら粗末に使つてもよいか、損料さへ出せば粗末に使つても宜いかといふに、夫れはいかぬ、中には録に損料さへ出さず喰逃げする人がある、即ち世の中に生きて居つて何等仕事をせんと死んで行く人は喰逃して行く人である。

「心理道話」

に面白い話がある、吾々の身體は廣い世界から借て来たものであ

る、その勘定は出る息、吐く息で勘定するので而して勘定がすむと、出る息吐く息が止まるので、チンドンガランと遣る時は彼れは差引勘定なしといふて算盤を投げたと同じで、チンドンガランの算盤を投げられた時、これは私の身體でなければ賞められても喜びもせぬ、悪口をいはれて腹立つ事もない、して見ると詰らん、地水火風をかう云ふ着物で包み、首や手足だけ外に出してゐるので、詰り地水火風で捏ねて出来た五尺の團子に色々の事をするが、達観して見ると詰らぬ事である。

□自分あつての人の爲め

私共がかうやつて法衣を着てゐても、餘り粗末な姿をして居れば

皆様に失禮で又不快な感を懐かせるため、乞食袋をも一つ袋で包まねばならぬが、考へて見ると詰らぬことである、御婦人方も此處に見へるが、御婦人方の第二の生命とも云ふべき物は衣裳であります、衣裳など餘り心配しても詰らんと思ふ、三四百圓も出して買つて御召になつた處が、御自分にお樂みになる所が多いか、人に樂しませる處が多いかといふと、三百圓出しても五圓か十圓しか前に出ぬ、外の二百七八十圓は後ろになるので、詰り人に見せるため人のために心配してゐる、達観して見ると實に詰らんことで、皆かやうに人のために苦勞して居ります。

「偽り」

といふ字は人偏に爲めと云ふ字を書きます、詰り人の爲めと書い

てあるが、實際人のためなご云ふは本當でない、皆これは偽りであり、私はどうでもよい、人の爲めだといふけれども本當に人の爲めばかりではない、自分あつての人の爲めである、この意味に於て好い着物を着てゐるのも、人のため又私共がかうして衣を着てゐるのもさうであります。

東京のある華族の方が私に法衣を一枚造つてやるが、どんな色がよいかといはれたから、私共は菰の方がよいが、貴君方のために着るのであるから、貴方のよいのを造つて呉れと云つた處、私のよいといふのなら友禪染の法衣といはれるから、それでもよろしいといつて笑ひましたが、私共こんな法衣でも着て來ぬのに、一休和尚のやうに餘り襪褌を着て居ると乞食坊主だと云ふ様なことをいはれる

から、こんな法衣を着てゐるので結局誤魔化してあるけれども、御婦人方が御主人の月給の三ヶ月分も一度に掛るやうな帯を買つて、御主人に迷惑をかけ、人に笑はれてまで詰らぬことをするは取消した方が宜いと思ふ、好い着物を着るといふも詰り偽りである。

いろ／＼の話が出るが、私は改めたいと思ふ文字があります、それは信用の

「信」

といふ字であります。

「信」

と云ふ字は人偏に言といふ字が書いてありますが、人間の言葉には嘘がないと云ふて、さういふ字を書き信用などと讀むが、人間位

約束を違へて何とも思はぬものはない、それで信用の信の字は、獸の偏に吾と云ふ字を書いた方がよいと思ふ、猫や犬などの鳴聲に誰が内容に這入らうと世の中がどうしやうと、ワンともチンとも心配せぬ、寧ろ偽りのないのは動く方が却つて嘘がないから信用の信の字はかく改造したらどうかと思ふ、人間が一番嘘を云ふのでこの

「信」

の字は動物の方から吾々の方に奉つた文字でなく、吾々人間が勝手に造つた物で、人間はどの位嘘をいふか判らぬ、何でも人のためだと云ふが、皆何を遣つても自分の爲めである、人の爲めだと思ふと腹が立ち不平が起る、何事も皆自分のためである、自分の爲めは身體の爲めでなく、生存の爲めであるといふ考へからすると不平が

起り癩癩が起るのであります、詰りこの廣い世界に五尺の身體は暫く自分の身體であると妄執してゐるものである。

心外無別法、法界唯一心を達觀すれば、世の中は心でないものはない、身體も自分の身體であると思ひますか、自分の身體であると思ふのも自分の心である、南無阿彌陀佛と信するのも自分の心であれば

「神よ」

と信するのもし自分の心からである、何事も皆心ならざるはなしと知らしむるのが佛の親切であります、茲に於てもう一步進んで御相談するのであります。

□何れの處にか心を求めん

もう一つ進んで相談すると、すべてのもの皆心ならざるはなしであるが、それならば惜しいと思ふ心、憎いと思ふ心、此奴が却々大變な間違になる、世界は神、佛、森羅萬象ことごとく心ならざるはなしといへば、それならば心だけわかれば宜しいかと云ふに、これがなか／＼の大問題である。

「法界唯一心、心外に法なし、若し人三世一切の佛を了知せんと思ふれば應に法界の性を觀るべし」

で一切何事も心を造るといふことは一般の教への人達もいふ言葉であるが、わが禪宗では心で止めるは間違である、すべてのもの皆

心であるといふ事は誰でも判る、書物を讀んでもこれまでは判るのでありませぬ、しかるにわが禪門では心に留ないのであります、盤山和尚の言葉に

「三界無法、何處求心」

といふことがある、多くの人はこの心に就て多く誤つた觀察をしてゐるので、唯何んでも心である、憎いも可愛も皆心である、妄想の迷ひの魂を以つて、これを法性也、法身也、これが絶大の心理であると思ふから本當の妙が判らぬので、未來永劫それが迷ひの本である、我物それを本來の面目と云ふが、それが間違であるので、盤山和尚の言葉に

「三界無法」

とある、三界と云ふに欲界、色界、無色界のこの三つを合せていふので、欲界といふと名譽慾とか黄金慾とかその他いろいろの慾の世界で、また色界といふと男女の慾ばかりでなく、すべて形の上には現はれてゐる生活で、無色界といふこの形を離れて即ち精神ばかりで生活してゐる世界で、佛敎ではこれを三界と一口に云つてゐる、これは別段その世界を他に求めるんでも、吾々の身體の上はその世界を現してゐるので、慾界色界の生活は即ち肉體の生活で、無色界の生活は即ち精神生活であつて、その人の修養によりて、この無色界の境界に到達してゐる人もあります。

達観すれば欲界、色界、無色界の三界はこれ物であるといふのではない、眞個に達観して見ると我心があると云つてもあるにならぬ

ので、自分の心を示すといふても示す事が出来ぬ、何か形のあるものでなければこれを示すに由がないのであります、而して

「法」

といふは物質を示して云ふので、この法は法律心理でなく三千大
手世界に慾界、色界、無色界すべて手に觸るゝ處のものには形即ち
法と云ふものはない、三界は形なし、形がなければ心に求めやうが
ないといふので何ともいはぬ、達観すると親切な言葉である、皆お
互に形の上に囚はれてゐる、今此處に物があるといふても夫れは時
が來れば無くなつて仕舞ふので、この扇子は百萬年の後まであるも
のではない、三界何れの處にか心を求めんやで扇子は破るればなく
なる、時計は打破ればなくなる、然らば従前の心は何處にある、あ

ると云ふならば出して見なさいと、盤山和尚はいはれた

「三界法なし、何れの處にか心を求めん」

といふので、夫れでこの法は此處では形も見ねば不可ぬので、三千大千世界にも心といふものはないのではないが、して見るとお互ひ心は何で働くか、今からして諸君がお出になつても、若し形を去つたら心が無いに違ひない、五官の働きで耳に人の音聲を聞き、眼に物の形を見て、心が働くので何か法がなければ心の働きがない、今私が此机をボンと叩いた時には、其處へ心が来る、實に心は形によつて漸く働いてゐるのであります、形がなかつたら森羅萬象示し様がない、その上に此奴が心であるといふのを一つ見て來いと云ふのが我宗門の大切な所である、これが判ると南無阿彌陀佛も、南無

妙法蓮華經も判るので、眞に双手の聲でも聞えるといふことになるのであります。

この

「三界法なし、何れの處にか心を求めん」

といふことに就て、大徳寺の大燈國師はかういふ偈を作つて居られる、これはよく味つて頂きたい、即ち

「千峰雨霽露光冷、月落松根蘿相前、等閑擬寫此時意、一溪雲深水潺々」

といふのであります、これは

「三界法なし、何れの處にか心を求めん」

と云ふことを偈を以て示されたのであります。

□「點心」即ちお腹の心に點す

我々の心の廣大なことに就ては、静岡縣に芦澤獨笑といつて、今年七十八才になる老人があるが、その人が誰の言葉か判らぬが人が書いてくれといつたら書いてやつたといつて示されたのがある、それは建仁寺の開山榮西禪師の法作りになつたので、心は何處にあるか判らぬが、形容すると

大なる哉心や、天の高き極むべからざる也、然るに心者天の上に出づ、地の厚さ測るべからざる也、然るに心の下に出づ、日月の光は喻ゆる可からざる也、然るに心者日月光明の表に出づ、大千世界は窮むべからざるなり、然るに心や大千世界の外に出づ、夫

れ大虚乎、夫れ元氣乎、心者即ち大虚を包みて、元氣を孕む物なり、天地我れを覆戴、日月我を待つて逆行し四時我を待つて變化し、萬物我れを待つて發生す、大なる哉心、海山も大きなりとは人いへど、心廣き及ばざりけり」

といふので、これは獨笑といふ人の書いて與へられたのであるが實に心は廣大無邊である。

しかし心とはかういふ物であるといふて示さうとしても示すことは出来ない、又日隱禪師は、

「分明三世不可得、一掃長空絶點埃、禪榻夜闌今如鐵、半窓明月帶梅來」

といつてこれが心を示してゐると云ふので、心があるといふても

過去の心も得べからず、未來の心も得べからず、分明に心の捉へやうはない、長空を絶して心といふ一點もないので、夫れなら心はないかといふと禪榻夜闌にして鐵の如く冷かなり、半窓の明月梅を帯び來ると、吾々の心は忌々しいといふ時に引出して使ふ、嬉しいと云ふときにも引出して使ふ、その外如何なる時でも引出して使ふではないが、私が今此机をボンと叩くと、その叩く以前は未來で、叩いてゐるのは現在である、さうして音がしたと思ふた時はもう過去である、この通りに我々の心は忌々しいと思つたら、忌々しいと思つたのは過去である、夫れで此の心は過去の心も、現在の心も、又未來の心も捉へられぬので、過去現在未來の三世に亘つて我々の心は得られないものである、これに就て面白い話しがあります。

徳心と云ふ禪宗の和尚があるが、この人の龍潭和尚といふのが、當時即佛で説くのは可笑しい、三世に亘つて修行せんに、そんな事が判るものではない、實に惡魔外道の如しと怒つて參考書を擔げぬ程持つて、龍潭和尚の寺へ問答に行く途中に、一軒の小さな菓子屋に休んだ、支那人は餡の這入つた餅とかお菓子などを食べる事、即ちかやうな事が點心と云ふのであるが、それは空心に點する。即ちお腹の心に點するといふので、點心と申すのであります、そこで、この徳山和尚はお腹が空いたから餅を食はうとして店の

婆さんに、
「點心を呉れ」
といつた所、その婆さんは

「貴方何方へお出になる」

といふから、徳山和尚は、

「お前は知らぬか、俺は金剛經に就ての學者だ、周金剛王とは我事である」

と申しますと、婆さんは、

「さうで御座いますか、それでは私が一つ貴僧にお尋ねしますが、私の尋に對して貴僧が適當な答をして下さらばお菓子ほごれだけでも上げます」

と申しました、それで和尚は

「金剛經にある事は何んでも尋ねて呉れ」

といふので婆さんが、

「過去心不可得、現在心も不可得、未來心も不可得といふことがあ
るさうで御座います、過去の心も得べからず、現在の心も得べか
らず、未來の心も得べからず、既に三世不可得ならば、即心を以
て點心せんとするか」

と問ふたので、徳山和尚一文菓子屋の婆さんに、かう問ひかけら
れて困つて了つた、三世不可得ならば何の心で菓子を食ふのである
か、これは字引にない、グツト詰つた、そこで婆さんは

「これに答へたら幾らでも菓子を無代で食べさせるが、その答の出
來ぬ様な坊さんには菓子を賣ることゝ厭だ」

といつた、それで徳山和尚が婆さんに向つて

「何處でお前は修行したか」

といふと龍潭和尚の處で修行したといふので、流石に龍潭和尚は
豪い坊主だ、定めてこの様な和尚の居る寺は、大きな寺であらうと
思つて來て見ると、意外にも小さな寺であつた、さうして龍潭和尚
に相見して色々問答してからもう夜が更けたからお休みなさいと云
ふので、龍潭和尚は

「フツ」

とその手燭の火をふき消した、これを

「龍潭吹滅の因縁」

といふのであります、燈火を消して了つたから、四面暗し、天地
暗黒、從來の知識では知ることの出來ぬ状態になつて了つた、茲に
於て徳山和尚はフツと燈火を吹き消された刹那に、

「分明なり三世不可得、長空一掃點埃を絶す」

といふことが判り、豁然として大悟したのであります、長らくの
間さぞお疲れであつたらう、さあお休みなさいと燈火を渡され、立
つて行かうとする刹那に吹き消されて悟つたのであります。

やはり貴君方が複雑な仕事をせられるにも、始は蠟燭の火を借て
即ち經驗の火を借ておやりになるに違ひないが、併し眞に經驗の火
を借て即ち經驗の火を借ておやりになるに違ひないが、併し眞に經
驗してやれる時は、もう何條文何の法文によつてゐると云ふことを
超越して、眞に蠟燭の火をその中に這入つて了つて居るから、教へ
られた知識を消化してやつて居られるが故に暗闇でも歩ける、人心
を通じてこの耳や目から這入つた、この力へやつてゐるのは本當

でない。

「長空一掃して點埃を絶す」

「一點の埃もないといふまで磨き上げた所に於てやつて行く時に、始めて本當の仕事が出来るので、最早かくなれば長官も下僚も同僚もない、眼中既に入なしで、又眼中佛も神もない長空を一掃して點埃を絶して居り、この何もない所に

「禪蘭夜蘭にして鐵の如く冷なり、半窓の明月梅を帯び來る」

と、又

「すてはてゝ身はなきものと思へども、雪の降る日は寒うこそあれ」
といふやうなものであると思ふ、夜分宿直などおやりになる時、何んなに苦しくども、何んともないといふても時來れば眠くなる、

この自然の處に、一種の光明が現はれてゐる

「すてはてゝ身はなきものと思へども、雪の降る夜は寒うこそあれ」
と言ひ

「禪蘭夜蘭にして鐵の如く冷かなり、半窓の明月梅に帯び來る」

といふも茲である、又道元禪師は深草に居られた時

「生死往來雲變更、迷途覺路夢中行、只今一事醒獨記、深夢閑居夜
雨聲」

と賦せられた、即ち何もないと達觀して共同生活をして、世の中の爲めに盡す處に味があるので、これは卑しい仕事だ、尊い仕事はかうだといふてそれを捨てゝ不可ぬ、手當り次第に親切に誠を盡して仕事をして行く處に妙味がある、長官のために仕事をすると思ふ

と腹立つ事もあるが、長空を一掃して點埃に絶するといふ考へで往かねばならぬのであります。

□地獄に入つて極樂

夜がふけて雪はちら／＼と降り、身は切らるゝやうな寒い時に、熱田を汽車が出てもう名古屋に着するといふ時分に、空を響かせ閻を破り、汽笛の音がして構内に汽車が這入つて來ると云ふ時は、苦しい切ない勤めが厭だと思はれる時があらうが、そこに云ふ可からざる味がある、これが鐵道大臣の爲めにするとか、誰のために盡す月給の爲と思ふと忌々しいが、

「禪蘭夜蘭にして鐵の如く冷かなり、半窓の明月梅を帯び來る」

と、茲に一種自分の光明を活躍して來るのであると云ふ考へで往くと、人に言はれぬ苦しい味の中、人にははれぬ樂みが見へる、これは修養の賜であります、かういふ精神上の興味を持つて行く時は、人が不平をいつて暮し、又面倒臭い厭だと思ふて暮す間に處して何んともいへぬ面白味を持つて暮して行くことが出来る、それは精神上の修養をなさる方の結果だろうと思ふ、僕は暇になつたら坐禪をやる修養をすると云ふ人があるが、この忙がしい間は五分でも十分でも肉體のある所精神ありて、そこにそれだけの餘裕を持つて修養して往けば不平もなくなり、何んもなく愉快に暮して往く事が出来る、心外に法を求むるは外道といふが、自分が常に接してゐるその境遇に處して修養をして往くといふことが大切で、道元禪師の

詩もそうである、死生の問題などは、長空を一掃して齒牙にも、心にも掛けぬといふ所にわが心にて掛けぬ、が雨滴のさらく落つる音にも心が働いて往くと云ふ處にいふべからざる味がある、かくの如く達観して、そして門徒宗の言葉では還相廻向して社會に出て來て

「禪蘭夜蘭にして鐵の如く冷かなり、半窓の明月梅を帯びて來る」

「すてはてゝ身はなきものと思へども、雪の降る夜は寒うこそあれ」
といふ調子で往けば、俗臭粉々たる世の中に、毎日複雑な業務に従事してゐるに拘はらず、人が振り返つても見て呉れぬ、その苦しき仕事の中に、一種極樂の光明を發揮することが出來、立身出世は望まんと、立身出世はせねばならぬことになります。

昨年私は三州へ往きまして定林寺といふ寺に泊りました時、そこには電燈がないので四つ手のランプが灯つてゐる、さうすると夜明頃一匹の蛇が這入つて來て、そのランプの周圍をブウ／＼いつて廻つてゐるので私は眼を覺まして、これは面白いと思ふて見てゐると蛇は手を焼き足を焼きして、ブウ／＼愚痴を云つて廻つて居つたがその中に遂にその蛇は焼け死んで了つた、これを見て私は寢床の中でさう思つた、これは蛇とあるが、時は今年末十二月二十五日である、人間といふ蛇も今日は何うでも宜い、來月は何うかならう、來年になつたら樂になるだらうと、ブウ／＼愚痴を言ひ乍ら結局死んで往くのである、この年末に際して東京でも大阪でも、人間と云ふ蛇がブウ／＼いつてゐるのだらうと思つてゐると、後から又一匹の

蛇が来たが、此奴はブウ〜と言ひ乍ら、直ぐランプの中にとび込んで死んで了つた。

成程人間はこれと同じ事だと思ひました、苦しみを以つて樂しとせねばならぬ世の中はもう一足行つたら樂になるだらう、ブウ〜と何時迄往つても苦しむべき四つ手のランプの世の中で生れた吾々は、何處迄往つても苦しむに極つてゐるから、ブウ〜と愚痴を言つて居らず、ブウと飛んで来たら直ぐ火の中に飛び込むと云ふ様な勇氣があつたら、三界無法心外に何を求めんやといふやうな風での苦しみも何もない火の中へ身體をクツ付けて了へば、もう暑いも寒いもない、暑い時には暑いといひ、扇使ひをしてブウ〜と言ひ、寒い〜とブウブウ言ひ、春の次には花見酒をのんでブウ〜いふ

が、夫れより苦しい中に飛び込めば、苦しみはもうなくなる、これを達觀すると地獄に入つても極樂に遊ぶやうな感想を持つて暮して行くことが出来るのである。

臨濟禪師も心の持ち方で地獄に行つても、花の淨土に遊ぶが如き心持ちで暮して往けると云つてゐられます、して見ると不平をいつて居ると極樂の中に居つても地獄同様と、寒いとて暖いとて居れば何時迄たつても火は離れては寒くてならぬ、夫れより素裸體になつて水でも、浴びた方が宜いので、如何にも浴びる時は寒いやうであるが、浴びた後はポカ〜と暖かくなる、萬物の靈長とも言ふべき人間が後から来た蛇が火の中へ飛びこむだけの勇氣がなければ駄目である、もう少し経つたら〜とブウ〜不平を言つては何時まで

經つても樂になると云ふ時なく、一生不平で死んで往かねばならぬ。

商標
禪機
裸体の光明 終

昭和十三年七月廿五日印刷
昭和十三年七月三十日發行

裸體の光明
定價金壹圓五拾錢

不許複製



著者 間宮英宗
 發行者 大坂市東區博勞町二丁目二二 松浦貞一
 印刷者 大坂市東區北久寶寺町四丁目 村松治助

發行所 大坂市東區博勞町二丁目二二番 攝替穴 阪三四一七五番 巧人社

(受 國 月 八 年 十 和 昭)

終

